

研究助成実施報告書

助成実施年度	2016 年度（平成 28 年度）
研究課題（タイトル）	地域共同体の再生 ― 芸術の生態学的実践
研究者名※	住友 文彦
所属組織※	東京芸術大学大学院 国際芸術創造研究科 准教授
研究種別	研究助成
研究分野	都市建築史、都市と文化
助成金額	100 万円
概要	現代美術においてソーシャリーエンゲージドアート（SEA）や地域アートプロジェクトと呼ばれる動向が顕著に見られるようになり、具体的な社会課題、衰退あるいは荒廃した地域の再生と関わるようになった。それを 20 世紀の前衛芸術と比較し、近代芸術が推進させた個人主義や物質主義を批判的にとらえ、美術史や批評理論だけでなく、社会思想史を組み入れて検討することで、心の問題と自然環境との共生を考える思想が芸術と社会をつなげる回路となっている可能性に着目した。そうした実践例として、中国とイギリスで注目されているふたつのアートセンターを調査し、理論的な考察と照応させた。
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

（ ）は、報告書提出時所属先。

1. 研究の目的

20 世紀を通して芸術は各ジャンルに相応しい表現媒体によって自律的であることを目指してきた。それは印刷や録音のような技術から、美術館や劇場のような文化施設のありかたに至るまで「自己参照性」を強く志向するモダニズム芸術の特徴ともいえる。しかし、近代化の過程において、それと緊張関係を持つもうひとつのモダニズムと言えるような、強く外側の社会との関与を志向する運動もいくつかあった。それは 1920 年代と 1960 年代のふたつの時期に起きた前衛芸術運動の一部、あるいは工芸やデザインなどが生活様式や価値観の変化を目指す運動などの先行例などに見出すことができる。

その後近年は、2000 年前後からとくに現代美術においてソーシャリーエンゲージドアート（SEA）や地域アートプロジェクトと呼ばれる動向が顕著に見られるようになった。とりわけ、具体的な社会課題と向き合うアートプロジェクトは衰退あるいは荒廃した地域の再生と関わる事例も多くみられるようになってきている。本研究は、まず 20 世紀の社会との結びつきを強く志向した各芸術運動と 2000 年以降の SEA などの動向を比較検討したうえで、とりわけ近年のアートプロジェクトにおける特徴をもとに相応しい調査対象を絞り込むことを目指した。芸術における様式や美学の変化と社会の変化をともに分析したときに、どちらか一方の要請として捉えるのではなく、その間に相関関係があるという見方はどれだけ可能なのだろうか。あるいは、19 世紀以前に芸術が上流階級に支えられてきたこと、もしくは「用の美」と呼ばれたことを批判的にとらえようとする点において芸術の自律性の追求は必然性があったとして、再び社会と結びつく芸術は 20 世紀の先行例とはどのように異なる方法で関わろうとするものなのか。最終的には異なる地域（アジアとヨーロッパ）において重要なアートセンターを調査対象として詳しく検討することで考察を行いたい。

2. 研究の経過

1) 重要な先行事例として、ドイツ・デュッセルドルフ郊外にある美術館 Insel Hombroich に関する調査をおこなった。日本語文献が少ない同施設に関する文献を収集し、併せて同美術館の滞在施設で制作活動をおこない、理事も務める芸術家の西川勝人氏が帰国した際に取材もおこなった。

2) 20 世紀の前衛芸術と今世紀の SEA などを比較するうえで、美術史や批評理論だけでなく、社会思想史を組み入れて検討することを重視した。そのことによって、近代芸術が推進させた個人主義や物質主義を批判的にとらえるために、例えば道教や社会主義などの影響を考えることになった。とりわけ、心の問題と自然環境との共生を考える思想が芸術と社会をつなげる回路となっている可能性に着目した。

3) 調査対象として、中国・広州市の郊外にある Mirrored Garden とイギリス湖水地方に位置する Grizedale Arts の二つを選んだ。それぞれ施設調査と運営者への聞き取り、実施されているプログラムの調査を行った。前者は事前に研究科の招聘事業で一般向け講座を開催し、設立に至る経緯や考えを聞く機会があった。

3. 研究の成果

まず Insel Hombroich を先行事例として取り上げた理由は、美術批評の理論的な枠組みではなく社会思想と結びついた地域再生の事例として重要だと考えたからである。20 世紀における 20 年代と 60 年代の前衛美術運動と深くかかわった芸術家の作品を収蔵し、かつ芸術家のための滞在制作アトリエを持つコロニー的な性質を持つ美術館であり、そうした点で芸術と社会の結びつきを強く意識したコレクションと建築デザインを形成したと言える。加えて、設立者のカール・ハインリッヒ・ミュラーは不動産業で成功した人物だが、この地域の自然植物の生態系を復活させることと自身のコレクションを見せるための美術館を独自の考えのもとで運営した。筆者は 2003 年に訪問したことがあり、加えて今回は文献調査と西川勝人氏への取材をもとに以下のことを明らかにした。

ミュラーは 1982 年に土地を取得したのちにいくつかの段階を経て建物を改修及び新築してきたが、1987 年にほぼ現状に近い状態に整った。その際に、キャプションや説明を省き、監視がない状態で、自然光のみで展示を行い、モノ同士が純粹に視覚的に関連づけられる展示の仕方を試みて、今もそれは変わっていない。例えば後期シュヴィッターズの作品はアフリカやオセアニアの美術と並べられ、ハンス・アルプと仏像の一部が並べられるという編年形式や地域別の博物学的な形式とは異なる展示方法が採用されている。これにはミュラーの友人で美術家の Gotthard Graubner の考えが大きな影響を持っていたと推測される。さらにミュラーは道教の考えにも関心を持っており、作品が環境衛生上安全に保存管理されるよりも、自然の摂理に従ってモノは生まれては消えていく循環の中にあるという考えを好んだらしい。しかし、彼の死後、財団には州の支援も加わり、コレクションに含まれる重要な作品をどのように保存管理すべきか、運営上の変化を余儀なくされているらしい。日常の生活空間の中にそのまま作品が置かれている状態と、環境衛生や接触などから保護するために鑑賞者との間にいくつもの距離をつくる従来の「自律型」美術館のあり方を批判的にとらえる視点が顕著にみとれる。

続いて、20 世紀の社会との結びつきを強く志向した各芸術運動と 2000 年以降のそれとを比較検討し、重要な近年の SEA などに見られる特徴を明確にしたい。まず 1920 年代と 1960 年代の前衛芸術運動はすでにペーター・ビュルガーやベンジャミン・ブクローらが指摘しているように、美術史や美術館などの支配的な制度への批判を掲げることで、芸術と生活と近づけようとする意図を持っていた。それが批評的に成し遂げた成果は多いにしても、敵対的な態度が大きな特徴だったと言えるだろう。それに対して、近年の SEA に代表される地域共同体と関わる美術の動向においては、批判的であるよりも非専門家や地域住民との協働作業を重視し、具体的な社会課題（移民、経済格差、教育格差、自然災害、戦争など）の解決に関与するようになった。ここには大きく二つの社会の変化が見て取れると考えられる。ひとつは、各課題は過去から継続しているものだが、資本主義と情報メディアが過度に進化し社会の分断化が顕著になり、そのことによって全体主義的な傾向に対して警告を鳴らすかつての芸術の役割よりも、分断を修復しつつなごめたる芸術の役割に関心が集まっていると考えられる。もうひとつは、20 世紀後半から進んだ様々な権利要求の社会運動が実を結び、価値観の多様化が大きく進んだことも挙げられる。それは人間のみならず、人間と他の生物や地球環境とがどのように共存できるのか考えるべき時期に来ているという認識を生み出し、芸術の持つ想像力を喚起する役割に期待が集まっていると考えられる。

近年の美術における動向を社会の変化と相関的に見る方法でこのように分析したことと、Insel Hombroich の調査結果をあわせて検討してみると、地域共同体や地球規模の分断をつなぎあわせ、有機的なつながりをとりもどすような活動を社会と芸術の関係を考えるうえで重要な潮流とみなすことができ、そうした関心から適切と思われる美術館やアートセンター及びそのプログラムの調査をおこなう必要性を感じた。ひとつは、国内外で高い評価を受けているキュレーターのフー・ファンが商業ギャラリーとは別に郊外の自然の中に Mirrored Garden を新しく設立した背景や実践内容を詳しく調べてみることにした。広州の市街地からおよそ車で 30 分ほど離れた山の中に展示室、ショップ、事務棟、ダイニングを点在させるような敷地の構成になっている。周囲はこの地域特有の亜熱帯植物で囲まれ、中央にある広い庭にはさまざまな野菜が植えら

れている畑と池がある。近隣の観光施設の来場者が偶然来ることがあるが、基本的には関心を持った者が訪れ、ここでゆったりとした時間を過ごすように作られている立地である。

この建築は日本人建築家の藤本壮介にフー・ファンが依頼して建てられているが、地域の風土と調和させるデザインになっている。煉瓦や漆喰など複数の素材が壁に使用され、牡蠣の貝殻で覆われた壁もあり、これも伝統的な建築で使われてきたものだが通常は根元を外に出すところを逆向きに使用し荒々しい素材感を強調させている。訪問時は中堅作家の王音（ワン・イン）の個展が開催され、人工光をほとんど使わず、窓からの採光によって鑑賞する展示になっていた。作品数を限定し、人の動線と光の効果を丁寧に考えて配置されていた。そのため暗がり画面がやや暗く見える作品もある。しかし、淡い色使いで名もない人々、路上あるいは家の中の何気ない風景を描いた作品は、そうした環境で静かに眺められるのに相応しいものだった。監視はおらず、空調は効きすぎない程度に使用されていた。美術作品を保護するために従来の博物館や美術館が必要不可欠としている仕組みを再考し、もっと制作アトリエや住環境に近い状態で見せていると言える。結果的に鑑賞者は作品とのあいだの距離を心理的に近く感じることができるとある。いっぽうで、雑多な道具や家具は排除し、大きな窓が数か所ある以外はホワイトキューブと言われる近代以降の展示空間として作品を集中して見せる機能を優先している。展示室は決して大きくなく、小さめの空間が一つと大小3つの部屋が連続する空間が一つである。それを見終えるとすぐに自然豊かな屋外空間に出て、そのままダイニングかショップ、あるいは中庭を挟んで反対側のプロジェクトスペースに行く。ここは小さめでガラス窓に囲まれた開放的な空間で別の展示を行う場所だ。二つの展示プログラムを同時に実施することができる。庭に向かったテラス席でコーヒーやお茶、軽食を楽しむことができるダイニングはフー・ファンが来客をもてなし、ゆっくりと話をするのにとても使い勝手がよさそうな空間である。実際にお茶を飲む伝統的な習慣を大事にすることで単に鑑賞の場でなく、自然と向き合い、お互いの考えを交換する時間を持つことを可能にする場所だろう。また、この庭はかなり広い面積があるが専門的なデザイナーが創り上げたのではなく、建物の維持管理担当のスタッフが手探りでおこなっており、何度か修正を加えながら育て上げてきたと言う。こうした明確な計画とプランを決めるのではなく、予期せぬ自然の影響や関わる人の能力によって変化していく要素を大きく取っておくことをフー・ファンは重要なことと考えている。それはなるべく自然に手を加えず雑草などと共存する有機農業の思想に影響を受けたらしく、もともと土地に備わっている力を最大限活用していく方法を模索しているようだった。

もう一つの事例は、イギリス北西部湖水地方にあるグライズデールアーツである。ここはアーティストレジデンスを中心とした活動で、滞在した芸術家たちは必ず農作業や建物の修復作業に従事することになっている。この独自の集団的で社会主義的な活動方針が関心を集め、ここ数年のターナー賞（イギリスでもっとも注目されるアワード）の受賞者の多くが若いころに滞在している点でも、同国で芸術と社会の結びつきを考えるうえで重要なアートセンターと考えられる。ここは美術館や展示室のような施設はなく、主宰者のアダム・サザーランドが住んでいる古い家を改装し滞在制作を受入れ、それと近くの村の中にあるジョン・ラスキンの博物館の運営委託を自治体から請け負っているため、そこで時折展示やイベントをおこなっている。したがって、展示という活動はかなり限られていて、日常的におこなっている農作業と建物の修復作業、あるいはその都度実施されるアートプロジェクトが活動の実態である。約20年ほど前にこの地に移り住んでから、少しずつ建物や土地を整備してきたため、今の滞在スペースとラスキン博物館の二重体制になったのは5年ほど前である。言い換えれば、時間をかけて地域住民との間で関係性を作ってきたとも言える。実際に、ラスキン博物館は地元出身の女性に館長を任せているが、様々な点でサザーランドの方針と彼女は異なる考えを持っている。しかし、あえて異なる考えや意見が地域にあることを調整しながら運営しているようだ。サザーランドは同時代のデザインやアートの動向にも通じているが、それを地域に押し付けてはいけないうして、滞在する芸術家たちにも関わり方を含めかなり丁寧に仕向けている。しかし、一方で自粛するのではなく、地域にも異なる考えや活動が入りこむことの良さを伝えながら、極端に振れないような有機的な関係性の保ち方を意識しているようだった。彼自身のこうした考えは、イギリスで1960年代から70年代にかけて活発だったフリースクールの影響が大きく、中学から高校を陶芸だけ実践する特殊な

学校に通っていたらしい。陶芸を通じて社会や化学の様々な知識を得ていく過程で、物を作ることの知識や経験の重要性を知っているわけである。このことは、オックスフォード大学で教えていたラスキンが、学生を連れ出して道路工事を実践していたが大学の限界を感じ、当地に移り独自の学校を始めたこととも通じている。実際サザーランドはかなりラスキンの思想の影響を大きく受けている。イギリスで産業革命によって人々が資本に搾取され、階級社会に新たな分断が発生した時期に社会主義と芸術の思想を融合させたことが現代に見直され、近年の社会と積極的に関わるアートプロジェクトが増えている状況をここに見て取ることができる。

4. 今後の課題

- ・近年のSEAをはじめとする動向の比較検討については、国際的に見ても関心を持つ研究者が増えつつある。そのなかで、かつての前衛芸術との比較、あるいは社会体制や歴史的変化の異なるアジアのなかで比較検討する必要性を感じる。そのことで、ここで指摘した情報メディアや資本主義による分断という課題と芸術の関係をもっと詳しく論じることができるようになるのではないだろうか。
- ・これと関連して、社会主義や Kommunismus、それから自然との共生を唱える思想と芸術の関係を考察する研究も国際的に増えている。それらの研究に国内の事例も交えることで、近年のSEAなどを語るための批評的な実践を多様化させていくことができるのではないだろうか。
- ・現代の心の問題はG. ベイトソンなどが人類学の一部として取り上げてきた実績があるが、そうした主要な宗教以外にも民俗宗教などを取り上げながら、信仰と芸術の関係性を考えていく点も大きな課題に挙げられる。